

桐と鳳凰の錦唐織

この錦の着物は「唐織」で、能楽の女形が着る豪華な衣装である。唐織とは、能の衣裳とそれを作る布の種類の両方を指す言葉である。唐織は江戸時代（1603-1867）に盛んに作られたが、これは 17 世紀初頭に作られたものである。

唐織は他の錦織と同様に、地織の上に浮織を重ねたものである。つまり、経糸と緯糸で基本的な柄を作り、その上に部分的に緯糸を補い、刺繍のように柄を重ねるのだ。刺繍とは異なり、デザインは後から縫い付けるのではなく、織りの工程で作られる。この着物は、地織が深緑の絹綾織で、白、淡い青緑、黄緑、ライトグレー、紺、黄、赤の糸で鳳凰と花桐の柄が描かれている。

その後、唐織はますます豪華になり、金糸や銀糸をふんだんに使ったデザインも多く見られるようになった。現代の能舞台で着用される唐織は、数キログラムの重さがあり、照明に照らされてキラキラと輝きを放つこともある。それに対して、この作品は、色鮮やかではあるが、落ち着いた雰囲気のある桃山文化時代（1573-1615）のスタイルである。また、衣服の上部から下部にかけて、図柄が交互に並んでいるのも、この時代の特徴である。例えば、袖の鳳凰は、上の段は左向きだが、その下の段は右向きである。

能楽の伝統は非常に様式化されており、面と華麗な衣装をつけた役者によって演じられる。装束のデザインは、役者がどのような役を演じるかを示している。例えば、赤い地色の唐織は、若い女性の役柄を表す。ここで使われているこの緑など、赤以外の地色は、中高年の役柄を表す。また、鳳凰や桐などの豪華なモチーフは、高傑（威厳）な人物を表す。

石川県は能の盛んな県である。県の前身である加賀藩は、16 世紀後半から 1871 年まで芸術・文化事業に多大な投資を行った富豪の前田家の支配下にあった。前田家は能楽に熱心で、在任中は地元の宝生流の能楽師を育成・支援した。

現存する最古の唐織の例として、この着物は 1974 年に重要文化財に指定された。